

# 三水会会報

北里大学水産学部  
同窓会 報  
第 3 号

昭和56年10月17日発行

編集者 田代茂年

発行 北里大学水産学部同窓会

(連絡先)

〒150 東京都渋谷区恵比寿3-39-2 (長屋)

振替口座 第一勧業銀行大手町支店 008-1182388



## 「会報を担当して」

三水会会報担当 田代茂年

眼前に広がる海と、背後に迫る山々、入り込んだ複雑な海岸線、そして恵まれた自然という三陸の環境の中に、北里大学水産学部が産声をあげてから、十年という年月が流れました。そこで、様々な青春を過し、巣立っていった若者たちは今、社会の中で猛しく成長し、活躍しています。

「三水会」の活動も、総会の開催・三陸校舎での就職ガイダンス・各助成金・会報誌の発行等々、着実に発展しています。さらに、会報誌においては、担当者の無能さにもかかわらず、諸先生方、諸会員方々、そして諸役員方の絶大なる御助力のおかげで、どうか三号を発行するまでに至り、心から御礼を申し上げます。

さて、今回は会報誌について私の考えるところを述べたいと思います。今まで、会長・副会長が述べられたように「三水会」は、人と人のつながりを大切にし、それを広げる事を主旨のひとつにしています。しかし、これは大変な事なのです。人間関係とひと言にいても、仕事やとなり近所、酒飲み友達とか様々あり

ます。しかし、私の考えるのは、ただ表面的なつき合いだけでなく、心と心の確かな結びつきなのです。これをつくり、持続させてゆくのは大変な事です。人の心は、常に変化してゆきます。まして大学時代の親友も、卒業し遠く離れてしまうと「去る者は日々に疎し」という事になってしまいます。また、近くにいっても、なかなか、本当の意味でのつながりを持つていくかどうかわかりません。

そこで、何が必要なのでしょう。それは、心からの素直な対話ではないでしょうか。近年では、家庭や親子間の対話が少なくと言われていきます。日常的な挨拶や会話におわらず、人間同志としての対話が本当に少なくなっていると思います。そんな環境の中から豊かな人間形成が成されるでしょうか。そんな人間ばかりの社会に発展があるのでしょうか。少し話が大げさになりましたが、そのような対話のない所から、本当のひととのつながり、本当の親友というものが生まれるわけがないのです。そこで、少なくとも、三水会会員の皆様には、この会報誌紙面を対話の

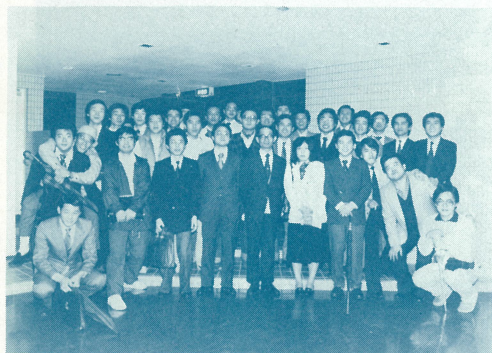
「場」として大いに活用していただきたいわけですが、どのような事でもかまいません。例えば、在学生であれば、三陸生活や就職等、同窓生だと家庭や職場等、教職員の方々は、三陸の生活や体験談等々、それぞれにあると思いますし、又それらに対する意見や助言等もあると思います。そして、そんな対話のある会報誌から、また新たな人間関係の広がりがあると思います。私はそんな人間くさい会報誌を創りたいと考えます。

創刊、二号、三号、それぞれ会報誌の形として、りっぱに出来上っています、しかし、それは、こちら側からの一方的なお知らせにすぎません。それではいけません。考えてみて下さい。会員皆様の会費で作られている会報なのです。そして、会員全員で創りあげていく会報でなければならぬのです。一部の人間の満足ではないのであります。そうして、会員全員で創られた対話のある会報が、後々受け継がれてゆき、「三水会」の発展につながってゆくなら、何とすばらしい事ではないでしょうか。現在のところ、年二回の発行ですが、これからの状況により増やす事も出来ます。また出来れば、数人による対談等も載せてみたいと

考えています。

以上、多分に理屈ばくて型苦しい意見でありましたが、この会報誌を多くの会員の皆様に、楽しく読んでいただきたいと節に願う結果であります。

最後に、何の因果でか知りませんが、この北里大学水産学部という場を介して、私たちはお互いを知るようになりました。このつながりを、いつまでも大切にし、なおかつ相互に深く理解しあつて人生を共に歩んで行こうではありませんか。会報への御意見、御感想お待ちしております。御精読、まことにありがとうございます。



## 第二回「三水会」総会 開催される。

「昭和五十六年度三水会総会」が去る四月四日(土)新築された北里本館大会議室に於て開催され、次の事項について審議決定されました。

### 一、代議員・役員の選任

五十五年度卒業の六期生より左記の代議員・役員が選任された。

#### 代議員

|          |         |
|----------|---------|
| 岩井 良行    | (六期・増殖) |
| 木村 洋     | ( " )   |
| 佐藤伊豆男    | ( " )   |
| 桃井 隆     | ( " )   |
| 磯部 義文    | ( " )   |
| 尾形 禎彦    | ( " )   |
| 坂本 雅哉    | ( " )   |
| 太田 浩司    | ( " )   |
| 理事 佐藤伊豆男 | (六期・増殖) |
| 坂本 雅哉    | ( " )   |
|          | (食品)    |

### 二、五十五年度事業報告

五十五年度事業報告がなされた。  
(一)、三水会会報を昭和五十五年十月と昭和五十六年三月の二回発行した。

### (二)、就職ガイダンスを昭和五十五年七月に三陸校舎に於て行った。

本年度は、薬品・養殖場水試関係の三名に協力願った。水産学部学友会に対し助成した。本年度は大学祭並びにクラブ(アメリカンフットボール路の会)に対し助成した。

### (三)、

尚、五十五年度事業として計画した。第一期生に対する同窓会名簿の配布は、五十六年度に新しい名簿が全学同窓会より発行されるので五十六年度に繰越した。また、同期会等の助成については、五十五年度は申請が無かった。

### 三、五十五年度決算案の承認

田中常任理事より、五十五年度決算について報告がなされた。以上について、佐々木監事により監査結果が報告され、承認された。

### 四、

五十六年度事業計画の承認  
長屋会長より、五十六年度事業計画について説明がなされた。

- (一) 会報の発行  
同窓生の動向、学部の実況等を年度内に二回発行する。  
尚、水産学部同窓生名簿を会報と共に送付する。
- (二) 同窓会名簿の配布  
全学同窓会名簿を第二期生に配布する。
- (三) 就職ガイダンスの開催  
各分野の卒業生による就職ガイダンスを水産学部四年次生に対し、三陸校舎にて行う。
- (四) 学友会助成  
クラブの活動費および大学祭、体育祭費用の一部を助成する。
- (五) 同期会等の助成  
同期会等卒業生の集会の費用の一部を助成する。
- (六) 水産学部開学十周年記念事業  
に対する寄付。  
水産学部開学十周年記念事業に対し援助する。
- (七) 卒業生の現況の把握  
住所不明者の追跡を行い名簿の充実を図る。  
説明の後、以上の計画案について、承認された。
- 五、五十六年度予算案の承認  
五十六年度予算案について説明



がされ、原案通り承認された。

六、その他  
長屋会長より、住所不明者、終身会費納入、そして、会報への希望について、話があり、会員諸氏の御協力をお願いする事となった。

引き続き同会館食堂に於て、太田学部長・鈴木助教・井田助教・齊藤助手、そして全学同窓会より紫会長をはじめ、会員も多数出席いただき、懇親会が開かれ、盛況でありました。

昭和56年度三水会予算

| 支出の部            |           | 収入の部          |           |
|-----------------|-----------|---------------|-----------|
| 科目              | 金額        | 科目            | 金額        |
| 1.事業費           |           | 1.会費          |           |
| 1)会報発行費         | 350,000   | 1~6期生<br>終身会費 | 600,000   |
| 2)同窓会名簿<br>配布費  | 90,000    | 2.部会助成金       | 1,480,000 |
| 3)就職ガイ<br>ダンス費用 | 150,000   | 3.繰越金(前年度)    | 1,035,809 |
| 4)学友会助成費        | 300,000   |               |           |
| 5)同期会等助成費       | 100,000   |               |           |
| 6)10周年記念<br>事業費 | 200,000   |               |           |
| 7)卒業生の<br>現況調査費 | 50,000    |               |           |
| 運営費             |           |               |           |
| 1)印刷通信費         | 50,000    |               |           |
| 2)会議費           | 150,000   |               |           |
| 3)総会費           | 200,000   |               |           |
| 4)事務費           | 50,000    |               |           |
| 5)予備費           | 1,425,809 |               |           |
| 合計              | 3,115,809 | 合計            | 3,115,809 |

昭和55年度三水会収支決算書

| 支出の部            |           |           | 収入の部            |           |           |
|-----------------|-----------|-----------|-----------------|-----------|-----------|
| 科目              | 実績        | 予算        | 科目              | 実績        | 予算        |
| 1.事業費           |           |           | 1.会費            |           |           |
| 1)会報発行費         | 309,800   | 200,000   | (1~5期生)<br>終身会費 | 675,000   | 3,630,000 |
| 2)同窓会名簿<br>配布費  | 0         | 200,000   | 2.部会助成金         | 1,400,000 | 1,600,000 |
| 3)就職ガイ<br>ダンス費用 | 55,000    | 150,000   | 3.雑収入           | 60,000    |           |
| 4)学友会助成金        | 250,800   | 300,000   | 4.受入利息          | 16,338    |           |
| 5)同期会助成金        | 0         | 100,000   |                 |           |           |
| (小計)            | 615,600   | 950,000   |                 |           |           |
| 2.運営費           |           |           |                 |           |           |
| 1)印刷通信費         | 9,197     | 100,000   |                 |           |           |
| 2)会議費           | 85,930    | 150,000   |                 |           |           |
| 3)総会費           | 241,052   | 300,000   |                 |           |           |
| 4)事務費           | 3,400     | 100,000   |                 |           |           |
| 5)準備委員会費        | 119,470   | 150,000   |                 |           |           |
| 6)雑費            | 40,880    |           |                 |           |           |
| 7)次年度繰越金        | 1,035,809 |           |                 |           |           |
| (予備費)           |           | 3,480,000 |                 |           |           |
| 合計              | 2,151,338 | 5,230,000 | 合計              | 2,151,338 | 5,230,000 |



## 「第8回北里大学水産学部体育祭」

開催される

体育祭実行委員長

佐京 広基

「ヨイ、ドーン！」一九八一年五月二十三日、号砲一発、春の温かな日ざしの中、第8回北里大学水産学部体育祭の幕があげられました。初日の駅伝大会は、前日の心配をよそに快晴。号砲と共に、体育会・文化会・有志より成る二六チームが大学（水産学部）の正門より「われ先に」とばかりに一斉にスタート。コースは、大学より浦浜、泊をへて甫嶺部落往復の二四、五km。各チームとも、日頃のうっぶん？（三陸での楽しみと言えば、釣り、マージャン、



そして酒くらいのものでしかないのです）を晴らすのはここぞとばかり、健闘に次ぐ健闘。しかし、日頃の練習を誇る体育会がやはり強く、一位、サッカー（一時間三十七分十四秒）二位、潜水A（一時間三十八分四十二秒）三位、野球（一時間四十三分〇五秒）四位、ワンゲルA、六位ラグビーA、と上位を占めたのですが、本年度の五位はなんと、有志の田中アパートチーム。このチーム、体育会、文化会、帰宅部、と田中アパート（三陸駅のすぐ下にある下宿）の

住人たちによって作られたもので、一時間四十五分二十二秒の健闘ぶりには、体育会もマッ青。また、恒例の、鉄道部の部旗を持つての出場（三米四方ほどの部旗を、四米ほどの青竹につけて、これをタスキ変わりに持つて走るのです。ハイ！）や、潜水部の潜水用具をつけての出場など「これぞ水産魂」という場面もあり、大いに盛り上がった一日でした。

続いて、二日目（二十四日）には、体育祭本祭が、水産学部のグラウンド及び、体育館にて行われました。競技に先立ち、名物のみこしが崎浜漁協前より大学まで、約2kmの道のりを、一時間半かけて練り歩き、すでに盛り上がりも最高潮。（酒があれば盛り上がる水産学部？）

さていよいよこの到着を待つて、十時すぎより開会式、太田学部長先生のあいさつにひきつづき競技が開始されました。

本年度は、今までと趣向を変えて、卓球・テニス・バレーボール・ソフトボール・フットベースボール・ドッジボールなどの球技を中心とし、その他に綱引き、スウェーデンリレーが行われました。かぎられた場所、かぎられた時間ではありましたが、みんな一生懸命、そして楽しそうに

競技を行っていました。昼休みの二時間は、昼食をとりながら軽音楽部のコンサート。続いて武道関係のクラブ（小林寺拳法部・鉄道部・空手道同好会）による演武が体育館にて行われました。各クラブとも、日頃の練習の成果をフルに出しきり「型」に「試割り」にと、大いに観客をわかせました。午後からは、三陸特有の霧雨の降る肌寒い天気となっていました。また、それでも各種目ともどこにか全試合を消化することができ（フットベースボールは、とちゅうで中止）ひき続き全員がグラウンドにあつまって、綱引き及びスウェーデンリレーが行われました。この頃には、約二百五十余名いた学生たちも、約百五十名ほどにへっており、ほとんど全員が、綱引き又はスウェーデンリレーに参加し、当日一番の盛り上がりとなりました。結果としては卓球の部一位岬荘チーム二位ワンゲルソフト部一位アメフト二位極道Bドッジボール一位野球二位スケートテニス部一位松田・松本組二位野球バレーボール一位鉄道二位岬荘チーム綱引き一位野球二位アメフトスウェーデンリレー一位野球二位潜水と、やはり体育会が強く、中でも野球同好会の活躍がめだちました。こ

うして、午後六時に（予定より大はばにおくれてしまいました。）閉会式が行われ、二日にわたる第八回北里大学水産学部体育祭の幕がとじられました。

こうして、体育祭はたいした怪我人もなく無事終了しました。本年度は、例年と趣向を変えて（例年はフールド競技中心）球技中心としましたが、学生の参加数も例年とあまり変わりなく、残念に思います。確かに、体育祭は学校行事でなく、学生行事です。で代休もなければ、休んでも咎められることもありません。しかし、学生行事であればこそ、だからこそ多くの学生に参加してもらいたいのです。学生達の手でつくることのできる唯一のものだから……。尚、文化祭が十月の中旬に行われます。御来場をおまちしております。

最後に、本部の不手際により、先生諸氏、学生諸君に多大な迷惑をおかけしたことを深くおわびすると共に、体育祭が行われるにあたり協力して下さった先生方、学生課、教務課、横浜小学校、警察……etcの皆様に深く感謝いたします。又体育祭を成功させるべく、連日夜おそくまで動き回ってくれた実行委員、本部員のみんな、ありがとう！

## 研究室の近況

### 「魚類生理学研究室」

藤野教授・山森助教授

水産学部設置申請時「水産種苗学」であった研究室名は、「種苗の質的向上を目指し、基礎学問に力点を置く」という趣旨もあって、「魚類生理学」と改められ、以来、研究の内容は生理学と遺伝学の両分野に亘っている。その間の研究室のスタッフの充実と近況などをご紹介します。



が着任、従来困難とされていた野生魚類の染色体・核型の仕事に着手、五三年、三島市の日本大学文理学部転勤後も、この道で着々成果を挙げると共に教職に励んで居られる。五一年春には山森邦夫助教授着任。五三年春には、室伏助手の後任として鈴木美枝さん（技術職員）が一年間お手伝い頂き、その後三島市の国立遺伝学研究所分子遺伝部で再びご活躍中の由。一年間を置いて五五年五月荒井克俊助手が着任し、ここに開設以来の宿題であったスタッフの充実が出来た。

まず生理学グループについて報告する。三陸に着任してから五年間に約五〇名の学生が筆者（山森）の下で卒論を専攻した。大変な数の若人と身近に接したわけである。この間いろいろなテーマをとりあげた。ウナギ、コイ、アイナメ、マコガレイ、ホタテガイ、エゾアワビ、トゲグリガニ、ヒラツメガニ、マボヤ等の心臓拍動を電氣的に記録し、環境や薬物の影響を調べてきた。どれも十分

に開花結実しているとは言えないが、これからだと思っている。

一昨年研究室のスペースが若干増えたので第一校舎一階に電気生理学実験室を設けた。昨年はこの中にシールド・ルームもこしらえた。第四校舎水槽室にもポリグラフを置いてある。実験環境は充実しつつあると言える。

生きた魚貝類を研究材料としているため、海産魚のサンプリングも重要な仕事である。釣りが主だが、昨年から研究船パンドルス号を使用し、能率を上げている。筆者の趣味の一つが釣りであり、釣りの好きの学生も多いので結構楽しんでいる。

一昨年からフグ毒にも関心を持つようになった。フグ中毒による死亡事故が時折ニュース種となるが、海の中でフグに当たって死ぬ魚やカニはいるだろうかとの単純な疑問があった。

猛毒のフグ肝臓や卵巣を与えると、ニジマスやクロソイはこれを忌避するが、テラピアはこれを食べて死ぬ。魚もさまである。カニ類も忌避する。魚やカニは味覚を通じてフグ毒を感じているものと想像される。これを神経生理学的に証明するため、院生の中村守孝君が頑張っている。

貝毒についても同様の研究を行なっている。

昨年十二月には広島大学植松先生と協同でサケの産卵行動を調べた。円型水槽にペアーを入れ、終日観察したのだが、心電図を記録したところ、放卵放精時に雌雄とも心臓が一時的に停止することがわかり、驚いた。

成熟生理や種苗生産に興味を持つ学生にはウナギの種苗生産研究で有名な浜名湖畔の東大附属水産実験所での卒論研究を勧めている。今年も古堅・中山の両君が同所の清水教授・佐藤助手の指導下に研究を行なっている。ここで一年間勉強すると見違えるほどたくましくなる。夏の浜名湖は暑いが頑張っている。

以上生理学グループの仕事は、一言で言えば、物理・化学・生物学的諸要因に対する反応、寛容度の種間差を解析して、その生理学的機序を明かにすることを目指している。遺伝学グループは、前述の性質を含む諸特性が種内の集団・個体のレベルでどの位の変異性を示すかを調べ、その中から適切な選択によって種苗の質的改善に資することをねらいとしている。そこで当初から(1)種・系群・種族の判別、(2)諸特性の種内変

異性の分析、および(3)育種技術開発の基礎研究などが柱となっているが、最近では(1)から(2)に重心が移りつつある。目下の所、岩手県が生産高日本一を誇るアワビを中心に、その他二三種を取扱っている。卒論テーマの例を挙げると、アワビ瘻貝の発生機構、ホタテガイの繁殖構造と異常貝の発生、アワビ・ホタテガイ・魚類の酵素などの耐熱性変異と温度適応度、アワビ類の人為雌性発生の基礎研究などがある。本年度は、学部四年次生一人がこれらを実施中。大学院博士課程二年次生の佐々木喜代志君は瘻貝の発生機序・劣性有害遺伝子検出など多角的に取組み、同修士課程二年次生の奥村誠一君は、従来の電気泳動易動度による変異とは次元を異にする酵素・たんばくの遺伝多型である耐熱性変異と生物としての温度適応度との相関という新領域にチャレンジ中で、着実に成果を挙げつゝある。新任の荒井克俊助手は、僅か一年余の間に、アワビの染色体・核型分析をものにし、目下雌性発生・倍數化によるクローン作出に挑戦中、遠からず素晴らしい成果が期待されそう。

五四年三月から半年、日本学術振興会外国人招へい計画によりアイル

ランド国立大学のN・P・ウィルキンス教授(動物学・写真)が来学、アワビとイガイの遺伝学で藤野と共同研究を行い相応の成果を得た。又同年六月から一月間タイ国立水研のラタナ・ポルタニヤ女史が研修に見えた。藤野は来九月、イタリアのベネチア市で開かれる水産増養殖世界会議で「増養殖における遺伝学の役割」と題して招請総述講演を行う予定。

## 「水産生物化学研究室」

緒方 助手

今年には三陸も夏らしい日が多く、泳ぐにも比較的楽なこの頃ですが、卒業生の皆さんも元気に頑張られていることと思います。

さて、水産生物化学研究室はというと、こ一・二年の間にこれまでの伝統を引き継ぎながらも、いろいろの点で変わりつつあります。

まず挙げねばならないのは、既に皆さん御承知の事と思いますが、松浦先生が学長になられた事です。現在、先生は白金の本部におられ月に一度程三陸にお見えになります。その日ばかりは研究室一同いつになく緊張した面持ちで過しています。

研究の方もこれまでの卒業生の皆

定。一方、地元では、大船渡市の基石海岸近くに岩手県立栽培漁業センターが完成し、先頃から、大学院・卒論研究の諸君約一〇名が交代で、連日アワビの種苗生産作業に参加しつつ、研究・勉強に精出している。諸先輩のご努力のお蔭で、スタッフ・施設とも格段に改善された。諸先輩に続いて皆元気でやっています。



さんが蓄積してくれた数々のデータをもとに、新しい考え方も取り入れて、それぞれの分野で進展を見ています。ちなみに、現在のテーマは、「魚類を中心とした各種生物の免疫機構に関する研究」、「貝類およびプランクトンの麻痺性毒に関する研究」、「海藻、下等動物の産生する抗菌性物質に関する研究」、「海産動物の刺咬毒に関する研究」の四つです。

免疫の仕事は魚類血清タンパクについての研究の流れをくむものです。この仕事はウナギ血清中の溶血素の研究から端を発し、ウナギにおける補体系や抗体の性状及びその意義を明らかにするなどの成果を上げています。現在はさらに、免疫機構の比較生化学といった方向に進展しつつあるテーマです。この仕事にはウサギ、ニワトリ、ヤギなどの実験動物を必要とし、それらの飼育管理も毎日ひと仕事です。

さて、ここ数年三陸沿岸ではホタテガイなどに発生する麻痺性貝毒が出荷規制等、養殖産業に大きな打撃を与えています。我が研究室では五年程前から毒性の年変動や各種生物の毒性を調べて来ました。昨年は水産増殖学研究室、水産衛生学研究室と協同で原因プランクトンであるブ

ロトゴニオラクスの出現量と貝毒量の相関などを詳細に調査しました。現在では毒の一部が貝体内あるいはプランクトン細胞内において何らかの物質と結合して存在するとの確証を得て、こうした物質の検索に力を入れていきます。これが発展してゆけば、毒の生成過程やプランクトン内での存在意義の解明へと結びついてゆくでしょう。この研究には定期的なサンプリングやプランクトンの大量培養など地道な仕事が必要で、現在総勢十人がこれらにかかりきりで頑張っています。

抗菌性物質の研究も以前から引続いているものですが、昨年度からは下等動物も対象に加えました。これまで目的の物質がなかなか単離できずに苦労しています。昨年モロイトグサという海藻からブロムフェノールの一種を単離することに成功し、構造決定しました。現在もいくつか取れそうな気配があり、さらに大量培養可能なプランクトンにも、検索の網を広げようかといった勢いです。

一方、刺咬毒の仕事は昨年度から始まったものです。海産生物の中にはカサゴ、オコゼ、イソギンチャクなど刺されたり触れたりすると激し

い痛みや皮膚の炎症を引起す成分を持つものがありますが、この研究ではこうした成分の活性発現機構及びその本体を明らかにすることを目的としています。これまでの研究で毒液の中にはヒトなどの補体成分を活性化する物質が存在することを突き止め、これが痛みや炎症を引き起すのだらうと判断するに至っています。現在これらの物質の単離精製に取りかかっている所です。

以上、研究内容の概略を述べましたが、全体としては海産生物の持つ生体防禦機構や他生物を攻撃する機構の解明を通して、海の生態系をつかんでゆくこととしているわけです。

なお、以前やっていた巻貝卵巣色素の研究は一応一段落し、お蔭様で筆者も博士号を取得することが出来ました。一緒に研究して下さった皆様に心より感謝申し上げます。

さて、研究室の雰囲気は相変わらずです。調子に乗り易い所が多少難点ですが、和気藹々、しかも精力的に夜遅くまで仕事をしています。もちろんコンパや自然発生的な飲み会も多く、ワイワイガヤガヤと、その取り留めのなさも相変わらずです。七月には温泉で一杯も兼ねて栗駒山登山に行きました(写真)。風呂で張り切

り過ぎ興奮を買ったとか買わないとか、良きにつけ悪しきにつけその発散するエネルギーは莫大です(省エネには逆行しますが)。そう言えば、今年の春の野球大会は準優勝でした。秋は必ず優勝をと皆意気盛んですが、いかになりますやら。御期待を!!

最後に、そろそろ生化研同窓会を作りたいと考えていますので、現在の状況など筆者まで御一報頂ければ幸いに存じます。この稿を借りてお願いしておきます。では、

#### 「会員カード提出のお願い」

本会は設立以来一年余を経過いたしました。これまで私共世話人としていたしましては会の骨組み作りに微力ながら力を注いでまいり、なんとか形だけは整ったのではないかと思われます。しかし、これまで会員の方々からの意見を聞く機会も少なく、活動も一方通行的となっていたのではないかと思われま。このような事から今回、会員の皆様の近況、また本会活動に対するご意見、ご提案等を伺うため葉書を同封いたしますので、是非ご提出くださいますようお願いいたします。

## 青年海外協力隊とは

枝 浩 樹（一期生）

青年海外協力隊事業は、昭和四〇年に政府事業（外務省所管）として発足しました。事業の実施は当時の海外技術協力事業団に委託され、同事業団の外局として青年海外協力隊事務局が設置されました。

昭和四九年八月一日に国際協力事業団が発足し、その重要な事業のひとつとして受けつがれるに至りました。この新しい事業団のなかで、ひきつづき青年海外協力隊事務局が、業務を担当しています。

協力隊が発足して以来一六年間に、協力隊員が派遣された国の数は三〇ヶ国（アジア・アフリカ・中近東・中南米・南太平洋）参加した協力隊員数は、のべ三、五八二人にのぼります。

（昭和五六年五月現在）。

青年海外協力隊事業の基本理念は、海外ボランティアとして職場活動と日常生活をともにすることによって、開発途上国の一般民衆の心情を理解し、お互いの人間的信頼のうえにたいって、その国の国づくりに貢献しようとする青年に対し、国がその目的達成の機会を提供し、その活動を支援することです。したがってこの事

業の目的は、「開発途上国の国づくりに貢献する」ことにあります。いいかえれば、開発途上国の要請にもとづいて、その国ぐにの「開発に協力することです」。

現在我が母校の北里大学水産学部から協力隊に参加した者は高野：五一卒、マラウイ、枝：五一卒、フイリピン、高塚：五一卒、コスタリカ、大西：五二卒、バングラディッシュ北之園：五三卒、ケニア、山崎：五三卒、マレイシア、三浦：五三卒、フイリピン、恭木：五四卒シリア、椿：五六卒、トンガ（訓練中）以上九名にのぼります。これ以外に北里大学としてみた場合は現在までに約二〇名程度が参加しています。

さてこのあたりで小生の四年四月のフイリピンでの活動について書いてみることにします。小生が協力隊員としてフイリピンへ赴任したのは今から約五年前の二月そして延々と四年四ヶ月の月日を過ごし今年の七月に帰国、当初の二年間は電気も水道もガスもない山の中なせこんな所にフィッシュポンドがと思いながら夜明けとともにおき日没とともに寝る生活、そして腰には山刀（刀当り約五〇×六〇cm）。乗り物は水牛か馬食べ物はきのこ、いのしし、ティラ

ピア、コイ、野性の植物等自然に親しんだ二年間でありました。主な仕事としては、ナマズ、コイ、ティラピア、インディアンメジャーカープ、草魚の種苗生産等を行ない溜池などに放流し現地の人々のタンパク源の確保の手助けを行なうことでした。その後ルソン島南部のビコール大学水産学部へ移り講師という形で学生実験、水産増養殖の講座を受けもつたわらウシエビ（*Penaeus monodon*）ノコギリガザミ（*Sylla selata*）等の種苗生産に関する実験を大学側からの要請に応じて行ないました。ここの生活は以前とはうってかわり小さい町ながらも電気もガスも水道もある文化的な生活を行なうことができ、特に記しておかなければならないことは美人が多かったということです。なにしろスペインとの混血が多いところで、右を見ても左を見ても美人、また学生も女子が約六〇％をしめる始末で回りは女性ばかりさぞ小生がもてたことが想像できるでしょう。

ウシエビ、ノコギリガザミの実験は一応小規模ではありますが成功し今後の養殖家への普及が期待されています。

## 編集後記

スズムシ・エンマコオロギ・カンタン等、秋の虫たちの鳴く声は、去りゆく夏を惜しむように聞こえます。今年は、冷夏もそれ程ではありませんでしたが、北海道・東北地方では台風や水害のダメージがかなりひどいようです。

さて、先日送付されて来た本学同窓会報に、「医学部預り金事件」について、報告されておりました。事件当初、私は「ああ、医学部はなァ」などと他人事のように受け取っていたのですが、この報告を読むと、同窓生諸貴兄の問題意識の強さと、不明瞭な事に対する敢然な態度を知り、自分自身の軽薄さに赤面する思いでありました。そして、こういう時期こそ同窓生として自覚し、大学を見つめてゆかなくてはいけないと思いました。

また、新学長に水産学部前学部長、松浦文雄教授が就任されましたが、大変な時期に就任されたなァ……ただ、お体だけは気をつけて下さいと申しあげる次第であります。